
昇華堂弁当

並木 道隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昇華堂弁当

【Nコード】

N6601U

【作者名】

並木 道隆

【あらすじ】

弁当を食べろ、食べろ、さあ食べろ。という話。

「ねえ、昇華堂弁当たべる？」

「えっそれは高倉健さんが映画撮影の合間に食べる例のお弁当なんじゃ！僕なんかが食べていいのかな。なんでくれるんだい？」

「一生に一度くらいは良いんじゃないの？」

「何で一生に一度なのだろうか？」

「だってそんな感じじゃないあんだ」

「なんかくやしいな。」

あたってるみたいな気がするところが特に。

彼女が試みているのは、僕の将来性に対する批判である。

あざけりであり、怒りの距離を計るギャブである。

怒る距離と怒らない距離、彼女はぎりぎりのラインを行きたいのだろう。なんの頓着もせず、昇華堂弁当をかつこんで器の大きさを示すか。反発してみせて気の強さを示すか。

どうしようか、あんまり腹へって無いんだよな。

「あんだって変わってるよねえ」畳み掛けてきた。くそっ。

「食べるの食べないの昇華堂弁当。一個しかないんだよ。高倉健からもらって来たんだよ」そうなんだ、高倉健からなんだ。いや嘘だろそれは。

「あんだ不器用だねえ。すらつと答えてさらつと流せばいいのに。そんなところは高倉健に似ているねえ」

少しほめられた気がする。昇華堂弁当にかこつけて僕をいいように言ったので。彼女は少し反省したのかもしれない。

「あのさ、毎日毎日食べられるとは思わないけど、昇華堂弁当をたべることにくらい出来ると思うんだ」

「へえ」彼女は笑った。

「その答えじゃ30点だねえ」採点されてるのか。

でも、言わせてもらえば彼女だつて15点くらいじゃないか。

今まで話した事も無いのに、いきなり、昇華堂弁当食べ、昇華堂弁当食えつて言われてもなあ

手作り弁当3つ食べた後だから無理だよって、いってみようか悩みながら僕は15点の昇華堂弁当をながめる。

(後書き)

初投稿。よろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6601u/>

昇華堂弁当

2011年7月6日22時28分発行